

学校で問題になったトムたち

トムとサラとネロはとても仲良しになりました。昼休みや放課後はいつも一緒です。学校で話題になっている話や、色んなゲーム、勉強を一緒にする時もあります。もともと、トムはいつもぼんやりしているんですけどね。それでも、トムは二人といつも一緒にいましたし、ネロとサラも、トムにとって自分たちといることが楽しいと思ってくれていると確信出来ていました。3人は今までの自分の楽しい場所も手放さず、新しい楽しい場所を手に入れた気持ちになっていました。それはとても幸せなことでした。

その「新しい楽しい場所」をしようちようするところは空き地です。以前ネロが親からもらった高価なペンをなくしてしまった空き地です。決してきれいな空き地とは言えず、いつ行ってもどこかうすぐらく、じめっとしています。でも、トムたちにとってそんなことはどうでも良いのです。子供のそうぞうりよくは、まるで魔法と同じです。大人にはどんなにつまらなく、くすんだもの見えるものでも、あっという間に色あざやかな遊園地に変えてしまうのです。この空き地も、大人が見たらとても居心地わるそうなところですよ。しかし3人にとっては、毎日行きたびにワクワクするところでした。毎日放課後にこの空き地に来ては、3人で少し遊んでから、じゅくへ行ったり家に帰ったり、それぞれ散らばっていきました。この時間が3人にとって、とても大切な時間になっていました。

さて、そんな空き地の隣には、コエンが住んでいました。コエンは40代の女性で、近所のスーパーマーケットではたらいっていました。スーパーマーケットは週末もお店を開いているので、平日が彼女の休みでした。コエンは休みの日は家をあまり出ないのです。夕方までテレビをガラガラ見てゆっくりするのが好きでした。

それが最近、サラたちが空き地に来るようになりました。ネロの声は少し大きいです。サラの声は小さいですがかん高いです。トムはめつたにしゃべりませんが、ちよつと鼻にかかった声をしています。バカ騒ぎをするような3人ではありませんが、その3人の声のコエンにはうるさく感じました。最初はたまたまこの空き地で遊んでいるんだなと思っていましたが、どうやらここがいつもの場所になっているのだなと思いました。コエンは子供がきらいでした。

コエンがカーテンから空き地をのぞくと、その小学生3人は、近所のBYR小学校の制服を着ていました。あの学校か、分かったぞ。きつと親にないしよで遊びに来ているんだな。とんだ不良学生たちだ。これはこらしめてやらないといけないぞ。コエンは何より、自分にめいわくをかけるやつは許しておけなかったのです。

コエンはさっそく学校に電話をかけました。ジリリとしょくいん室の電話が鳴りました。電話をとった先生は、ぐうぜんにもネ口たちの担任の先生、チェイニーです。チェイニーは、熱心な先生でしたが、トラブルをきらう先生でした。なのであれ？って思うことがあっても、周りの意見や決定したことをしっかり守って働いていました。そんなチェイニーにとってこの電話を取ったことは、この日さいだいの不幸でした。だって、この電話のベルは、これから来る大きなトラブルの合図となるベルだったのですから。

「もしもし、こちらB Y R小学校です。」とチェイニーが言いおわる前に、コエンは話し始めました。「私、近所に住んでるものですが、おたくの学校の生徒が空き地で、さいきん毎日バカ騒ぎをしてるんです。大きな音を立てたり、何かをこわすような音もしていたかも。きつとじゅくをサボったり、勉強の時間をけずってあそんでいるんじゃないかと思って電話かけたのです。私、あの子たちの未来がとも心配なんですよ。学校は何か対策をした方が良いと思ひましてね。男の子二人に女の子一人。男の子の一人が、大きな声でトムって呼んでましたよ。本当に大きな声でね。」

これには、チェイニーもびっくりしてしまいました。トムと言う名前の生徒は学校に何人かいますが、自分のクラスにもトムがいるのですから。あたふたしてすぐ確認しますとしか言えませんでした。コエンは言いたいことを言うとさっさと電話を切ってしまいました。もう夕方でした。チェイニーは仕事が終わったあと、予定があるわけではありませんでしたが、自分のクラスのトラブルかもしれないと言う恐怖と、仕事が長引いて帰るのが遅くなるのではと、とても不安になりました。しかし、このままにしてしまったら自分のせきになっってしまうので、校長先生に話しに行かなくてはいけませんでした。チェイニーは校長室の前で大きいため息をつきました。

電話のことを報告すると、校長先生の顔はみるみる怖くなりました。そう、じっさいに怖がっていたのです。校長先生はアビゲイル校長と言います。アビゲイルは何年もB Y R小学校が、「しんがくこう」であることがほこりでした。この話は、もしかしたらそれをおびやかすのではないかと直感的に思ったのです。アビゲイルは子供たちの行動は伝染することを知っていました。それゆえに、てっぺいしたルールや、みんなよりたくさん勉強しなければ幸せになれないこと、あそぶことは、その場が楽しいだけで、しょうらいの幸せから遠ざかってしまうと教えていました。だから生徒たちは、あそぶことはいけなことをしていると悪い、友だちより良いせいせきを取れば、それだけ得意気になっていました。そうです。「正しい」とは、一つの答えがあるわけではなく、たくさんの方が答えだと思ったことが「正しい」になるのです。アビゲイルはこれを知っ

ていました。そしてアビゲイルの「正しい」は、この学校がしんがくこうであり続けることでした。

アビゲイルは急いで先生たちをあつめ、きんきゅうの会議を開きました。「先生方、当校の生徒が近隣の皆さまにめいわくをかけているそうです。これは学校としてすぐに対処しないといけません。その方の話によると、トムと言う生徒が混じっていたそうです。トムと言う名前の子がいるクラスの担任は、明日ホームルームで聞いて下さい。その他のクラスも、こんなことがあったとしっかり伝え、同じことが起きないようにしていただいた対応をお願いします。」学校でこんな話になっているとは全く知らない3人は、その日も幸せな気持ちで眠りにつきました。

次の日、さっそく朝のホームルームでこの話が上がりました。「昨日、近隣の方から、放課後まいにち空き地でバカ騒ぎをしている我が校の生徒がいると電話がありました。その中にトムと言う名前が聞こえたと。トムくん、心当たりはありますか？」ネロとサラはものすごくびっくりして、不安な気持ちに包まれました。トムは、相変わらずゆっくりです。20秒ほどして、先生がイライラし出した時にトムは答えました。

「それは僕だと思えます」

クラスがざわめきました。チェイニーはなんてついていないんだろうと思いました。それから先起こるかもしれない悪いことが一気に頭を駆け巡り、絶望的な気持ちになりました。チェイニーは自分のせきになることを何より恐れたのです。そして、なるべく自分のせきにならなないように、早く解決しなくてはと思いました。

「他の二人は誰なの？」と聞くと、すぐにネロが「僕です」と手をあげました。続いてビクビクしながらサラが「私です」と手をあげました。意外な組み合わせだとは思いましたが、そうゆっくりはしてられません。チェイニーはすぐに先生たちに連絡し、昨日に引き続ききんきゅうの会議を開きました。そして、3人から話を聞くことになりました。

その日の放課後、3人は校長室に呼び出されました。中にはアビゲイルとチェイニーが座っていました。3人が入ってくると、アビゲイルは不気味なほどいいいに部屋の中へ招き入れられました。3人が横一列に立ち並ぶと、アビゲイルは話始めました。口元は笑っていますが、目はするどく3人を見えています。

「話は分かっているね？ お前たちはとんでもないことをしたんだよ。何が問題か言ってみなさい。」

ネロは答えました。「はい、それは僕たちがうるさくして、空き地の近くに住んでいる方にめいわくをかけてしまったからです」アビゲイルは表情を変えずにうなずきました。

「そうだ。しかもとんでもないバカ騒ぎをしたそうじゃないか。大きな音を立てたり、あるところか物を壊していたりしていたそうだね。この学校の制服を着てよくもそんなことが出来たものだよ。」

これにはネ口が大慌てで言い返します。

「待って下さい。確かに空き地には行ってきましたが、大きな音を立てたり、ましてや物を壊してなんかいません。それに、確かに声はうるさかったかもしれませんが、バカ騒ぎなんてしていません」「サラも」「そうです！」とふるえながらも精いっぱいの声で続けました。

それを聞いたチェイニーは、これはやばいと思いました、がもう遅いです。アビゲイルのどなり声が部屋中、いやもしかしたら学校中にびびきわたりました。

「この期に及んで、まだいいわけをするのかい！ まったくなんて子たちだ。自分たちがめいわくをかけておいて。それではまるで向こうがウソを言っているのと同じことだぞ。いいかい、うるさいかどうかはお前たちが決めることではない。うるさいと思ったら、その人にとつてうるさいのさ。ちがうのかい？」

どなり声にネ口とサラはすっかりおびえてしまいました。その姿を見て、アビゲイルは心の中に満足感が生まれましたが、その時、ぼんやりとしたままのトムが目に入りました。手応えのなさそうなその表情は、アビゲイルにはとても不満でした。「トム、君はどう思っているのだね？」とトムの方をジロリとにらみました。

トムはそのまま、ぼんやり立っています。最初は少し返答を待っていたアビゲイルですが、すぐに苛立ち始めました。「なんだ、その態度は！」それでも相変わらずですトムはぼんやり立っています。「トム、校長先生にあやまりなさい。」とチェイニーも慌ててトムの返答をうながしますが、それでもトムはぼんやり立っています。そして、一分が経ちアビゲイルが痺れを切らしどなるうとした時、トムは「ごめんさい」と言いました。

アビゲイルは少しだけニヤリと笑い「まったくとんでもないことをしてくれたものだよ。次やったら、もう我が校にはいらなくなるかもしれないよ。分かったね？」

ネ口とサラはなんとか許してもらった安心感と、やってもいけないことで怒られたことへの悔しさ、とは言えその原因を作ったのは自分たちだと言う気持ちもあり、何をどうしたらいいかわからない感情におそわれました。しかし、これ以上何も出来ることもなく、トボトボと帰り始めました。トムは何も言いませんでした。が、この日は二人の方を見ることなく、歩き始めました。

この日は3人、別々で家に帰りました。